卓　　話

平成 16 年 9 月 21 日

熊谷守一、イサム・ノグチののこしたもの

岐阜県美術館長 古川 秀昭 様

熊谷　守一　くまがい もりかず

１８８０年　岐阜県恵那郡付知村に岐阜市の初代市長熊谷孫六郎の三男として生まれる。父は岐阜市において生糸商を営み、同市の初代市長を４、５年つとめた後衆議院議員になった。

１９０５年　樺太調査隊に加わる。以後２年間北海の島々を廻り、各地の風光、地形の記録やスケッチなどをする。この時の作品は全て関東大震災で消失した。

１９５１年　二紀会を退会。以後は無所属作家として世俗を離れ、自由な政策を楽しんだ。作風は次第に色と形を単純化しつつ独自の様式を確立。

１９６４年　パリで古典開催。

１９６７年　文化勲章受章者に内定したが、「これ以上人が来るようになっては困る」と辞退する。

１９７２年　勲三頭叙勲の内示があるが辞退する。

１９７６年　岐阜県恵那郡付知町に熊谷守一記念館が設立される。
１１月、洋画商展出品の「あげ羽蝶」が油絵の絶筆となる。
晩年は身辺のものを多く描き、水墨画、書もよくした。代表作は「陽が死んだ日」（１９２７年 大原美術館蔵）

１９７７年　肺炎のため逝去。享年９７歳

日本の伝統工芸とアートの出会い------イサム・ノグチの〈あかり〉

彫刻・庭園などの環境設計・インテリア・舞台芸術など様々な分野でその多彩な才能を発揮した日系米国人アーティスト、イサム・ノグチ。彼がたまたま岐阜に立ち寄り、岐阜提灯に出会ったのは１９５１年（昭和２６年）のことでした。光の彫刻を模索していた彼は和紙を透かして輝く提灯に惹かれ、以来幾度も岐阜へ足を運び、亡くなるまでの約３５年の間に２００種類にも及ぶ＜あかり＞を制作したといわれます。生誕１００年を記念する本展は、日本の伝統とアートが出会い、洋の東西を超えた豊かな生活空間を演出する＜あかり＞の世界を紹介します。--財団法人岐阜県教育文化財団「光の彫刻あかり」パンフレットより–